ISSN 1880-0394

Annual Bulletin Report 2020

東海大学文明研究所所報 2020

巻頭言

「with コロナ」から「post コロナ」を見据えて

平野 葉一
文明研究所員
文学部文明学科・特任教授

2020 年は「コロナに始まり、コロナで終わった」1 年であった。この新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、2021 年初頭には世界で 1 億人を超える感染者を数え、2 百万人を超える人々が亡くなっている。その数は増え続け、脅威は現在もなお続いている。連日のニュースでも「三密を避ける」、「ニューノーマル」、「with コロナ」というフレーズが流され、われわれの生活はまさに五里霧中をさまようが如くである。実際、イベントの縮小や中止、観光や外食の自粛といったサービス業に代表されるように、人々は経済活動の低下に困窮し、また「家にこもる」といった状態を強いられている。それは研究や教育でも同様で、多くの学会や研究会がオンライン開催となり、大学の授業もモニター画面をとおしての遠隔授業の導入を余儀なくされている。すなわち、人と人が接するという最も基本的な活動が世界全体で阻害されているのであり、それはまさに「文明の危機」といった様相を呈しているといわざるを得ない。

現代文明はある意味で科学と技術に根ざした文明である。一つの見方として、今日の文明は、自然を探求する科学が人間の豊かさを求める技術と結びつき、その恩恵を享受するなかで築かれてきた。そうした現代の科学技術は、自然の開拓──ともすると自然からの搾取──を推し進めてきた。科学技術は確かに人間に comfort を提供してはいるが、その反面、行き過ぎた科学技術、その下で展開される人間営為は地球規模での温暖化や海洋汚染，放射能汚染といった自然環境への阻害をももたらしている。今日、イデオロギーや宗教などの違い、自国の利益優先による衝突はあるものの、世界はグローバル化の方向にある。この動きは経済に起因するところが大きいが、同時に国連が提唱する SDGs に見られるように「世界中のだれ一人もとり残すことなく」人間生存の安寧を目指す動きも見られる。他方、グローバル化によって世界の距離が短くなるなかで、地域多様性の尊重も叫ばれている。19 世紀以降の帝国主義は列強先進諸国の都合による文明伝播を進めたが、それによって浸食された各地域の多様な文化、生活があらためて見直されている。それは、少数民族の文化、言語の保護や復興としても表れている。多様性に富む地球は多様な見方によって理解されるべきであるという思想である。

今回の COVID-19 パンデミックを科学技術文明という視点から考えてみる。そもそも人間は何故にコロナウイルスに遭遇したのか。この問いの答えは簡単ではないにしても、その要因の一つに自然に対する人間の過度の無防備な近接があることは想像に難くない。このウイルスを一つのバイオハザード、環境ハザードと考えるならば、人間社会はそれに対して脆弱なまま過度に暴露した状態だったのではないか。それは自然に対して科学技術を手にした人間の過信とも受け取れるのである。

同時に、現在の COVID-19 パンデミックは、上で述べた二つの方向性のそれぞれに脅威をもたらしている。ワクチンの接種が始められたにしても依然として治療薬を見出せない状況で、われわれは人と接触する機会の制限を強いられている。それは、いい意味でも悪い意味でもグローバル化の流れが制限されることを意味する。この状況は経済的な負的効果を生じさせるとともに、インターナショナルという視点からナショナリズムというイデオロギーへの転換、再帰を促す。そこには前アメリカ大統領の「アメリカ、ファースト！」にも似た感情の再燃が危惧されるのである。逆に、このパンデミックが各地域に根付くさまざまな活動を制限することで、地域の多様性もまた危機に瀕する。世界の人々が感染拡大を防ぐために一様にマスクをし、外出を最小限にとどめるといったモノトーンな生活が継続され、そのなかで医療従事者だけが逼迫した医療を支えるという構図である。そして、たとえば観光と称される人的交流がある地域の文化を理解し、それを他所へ伝えることも、極端に減少する。それは、人類が歴史や伝統のなかで築いてきた文化、文明の危機を意味している。

人類はどのようにしてこの危機から脱することができるのであろうか。現在はまだそれを論じる段階ではないかもしれないが、それでも現在の我々がいかなる危機に直面しているかを見極めることは重要である。人間生命という点ではもちろんではあるが、このパンデミックが現在のわれわれの文明の存続に与えている影響を見ておく必要がある。かつてヨーロッパ大陸で大流行した黒死病は、農奴解放とそれに伴う封建制崩壊をもたらし、中世から近世への転換を加速させた。また、ペスト大流行後に「メメント・モリ」（死を忘れるな）を題材とする文化活動の活発化も見られる。すなわち、パンデミックはその最中だけではなく、その後の人間営為にも何らかの影響をもたらす。そうした文明の動向を注視することも文明研究の重要な使命であると感じられる。

文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創設者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える問題、これからの文明のあり方について総合的に研究する機関です。

当研究所の発足は 1959 年に遡りますが、2001 年の新文明研究所の設立後は、「21 世紀文明の創出」という研究テーマのもと、2013 年度まで、おおよそ 3 年を 1 期とする研究プロジェクトを策定し、研究を推進してきました。第 1 期（2001 年度～ 2004 年度）は「現代文明の展開と社会文化的多様性」、第 2 期 (2005 年度～ 2007 年度) は「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」、第 3 期 (2008 年度～ 2010 年度) は「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」、第 4 期（2011 年度～ 2013 年度）は「創造すべき 21 世紀文明」でした。2014 年度からは、本学の第 II 期の中期目標（2014 年度～ 2017 年度）を受けて、「文明とグローバリゼーション」をテーマとして掲げて、共同研究を進めました。

2016 年 4 月の総合社会科学研究所の設置に伴って、本研究所の研究活動は人文学を中心に進めていくことになり、人文学の活性化と、本学が所蔵する文明遺産の整備・研究・活用とを、２つの柱として、共同研究をすすめています。前者では、この間、「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」と「20 世紀人文学の方法論的再検討」の 2 つのコアプロジェクトを実施してきましたが、2019 年度からは両者を統合して、コア・プロジェクト「人文学の方法論に関する総合的研究」として研究活動を推進しています。後者では、コア・プロジェクト「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」において、本学が所蔵する「アンデス先史文明に関する遺物」（アンデス・コレクション）と「古代エジプト及び中近東コレクション」（AENET）の保管・整理を行うとともに、本学のマイクロ・ナノ研究開発センター等との連携による文理融合型の研究や、展示会の開催などを行っています。また、学部を超えた共同研究である「戦後大衆文化の基礎的研究──緒形拳関係資料の整理をめぐって──」(2017 ～ 2020 年度)、「人間営為と環境の関係性－人文学・社会学の視点から」(2019・2020 年度) についても、本研究所の課題として展開しています。

2015 年度から東海大学ヨーロッパ学術センターで開催し、2020 年 3 月には高輪校舎で開催する予定であった国際シンポジウム「文明間対話」第 5 回はコロナ禍のため開催を断念せざるを得ませんでしたが、『文明』第 27 号を、欧文編 Special Issue of Covid-19 として刊行し、国際交流の継続と、若手研究者や大学院生の育成をはかっています。

なお、そのほか 2020 年度の活動で特記すべき事項として、「戦後大衆文化の基礎的研究」プロジェクトの研究成果をふまえて 2020 年 10 月 3 日から 12 月 6 日まで横浜市歴史博物館で企画展「俳優 緒形拳とその時代──戦後大衆文化史の軌跡──」を開催したこと、アンデス・コレクションの HP を 2020 年 11 月末に開設したこと、学外の研究者とも連携して「東海大学アンデスコレクション研究懇談会」を 11 月 17 日と、2 月 19 日の 2 回開催したことなどがあげられます。

2020 年度の研究プロジェクト

「人文学の方法論に関する総合的研究」（コア・プロジェクト 1）

本研究所の柱の一つである人文学の活性化について、2018 年度まで実施してきた「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」と「20 世紀人文学の方法論的再検討」の 2 つのコア・プロジェクトを、2019 年度からは「人文学の方法論に関する総合的研究」として統合し、従来の研究活動を継続するとともに両者の研究交流をはかってきた。

「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」班

平野葉一・田中彰吾・吉田欣吾・服部泰
鷹取勇希・沓澤宣賢・中村朋子・渡邊青

現代文明において科学技術が担う役割は大きい。自然を探求する科学が技術と結びつき、そうした科学技術が人々の社会を支え、その comfort を保証している。昨今ではとくに ICT（情報通信技術）の進展が人々により多くの恩恵をもたらしている。それだけに、いわゆる STEM（science、technology、engineering、mathematics）教育の重要性が叫ばれている。しかし、人間が形成する文明は科学技術だけで成り立っているのではない。文明は人間の哲学的思考、価値観、倫理観、人の志向や感情などといった内面的な動きや、社会制度や経済といった外的な装置の全体から形づくられている。こうした状況に鑑み、本プロジェクトでは従来の人文学の枠組みを超えた知の体系として、複合的視点から人間営為と文明社会の在り方を考える学問としての「超領域人文学」の構築について検討してきた。また、この問題は本学の大学院文学研究科文明研究専攻の教育・研究にも関わるという点から、本プロジェクトは同専攻との連携をはかりながら進められてきた。2020 年度における活動状況は以下のとおりである。

（1）国際シンポジウム

本プロジェクトでは、その前身のプロジェクトからの継続として、国際シンポジウム「文明間対話」（Dialogue between Civilizations）を開催してきた。しかし、昨今の新型コロナウイルス感染症の関係で、2019 年度末以降その開催には至っていない。また、2020 年度も小規模な国際研究集会を企画していたが、2020 年 4 月以降の状況から開催はできなかった。こうした状況の中、今年度は欧文誌を「COVID-19 特集号」として発行することとなった（詳細は（3）を参照）。

（2）学内における研究会

超領域人文学の構築に向けた事例研究として当該の大学院生や大学院出身者との研究会を秋セメスターに 10 回開催した。これらの研究成果は、『文明』、『文明研究』（文明学会）などに論文、研究ノートとして報告されている。この研究会はテーマとして「環境 QOL」を含んでおり、環境に関する個別プロジェクト（責任者：中嶋卓雄）との連携で研究を進めた。とくに、個人や個人が属する集団の QOL に関して、人間の心身の問題、アイデンティティの問題などをテーマに研究し、研究発表を行った。

（3）欧文誌 “Civilization”（文明）第 27 号の発行

国際シンポジウムの開催ができないなか、今年度は欧文誌を「COVID-19 特集号」として発行するに至った。11 月に Call for Paper を公開し、最終的には 10 編の論文が投稿された。とくに上の（2）で示した大学院生、大学院修了生（本学教員）に関しては研究会での研究報告をとおして議論を重ね、最終稿を受理した。

コロナウイルス禍における研究活動に関しては、今年度をとおしてその方法が整備された点もあり、今後の活動に生かしていきたい。

「20 世紀人文学の方法論的再検討」班

山本和重・馬場弘臣・村田憲郎
川﨑亜紀子・篠原聰・斉藤仁一朗

本研究計画の目的は、人文学に対する社会的評価が低下するなかで、その活性化のために、20 世紀人文学の方法論を歴史的な視点からふりかえり、21 世紀に継承すべき方法をさぐることにある。その問題関心の背景には、19 世紀的な工業化型近代化や技術万能主義に照応した科学主義的人文学に対して、20 世紀には、哲学、歴史学、民俗学、教育学など、さまざまな領域から反省と新たな方法論が提示されてきたが、それらの成果が必ずしも今日の人文学に継承されておらず、そのことが人文学における方向性の喪失状況、ひいては人文学に対する社会的評価の低下とつながっているのではないか、という認識がある。こうした認識の可否を含めて、学問領域を超えた共同討議によって、人文学の可能性を探ろうと、2016 年度から 2019 年度までの計 10 回の研究会を開催した。そこでの議論から身体性（感性）という問題が、20 世紀人文学の大きな特徴（論点）として浮かび上がったので、2020 年 3 月に高輪キャンパスで「人文学における身体性をめぐって」というテーマでのシンポジウムの開催を企画したが、新型コロナウイルスの感染拡大により開催を断念した。2020 年度における開催を期したものの、第二波、第三波が続き、一堂に会してのシンポジウムの開催はままならず、オンラインでの開催を視野にいれて、第 11 回の研究会を下記の内容で開催した。

第 11 回研究会（2020 年 12 月 22 日） オンライン形式

書評「樋口聡 編『教育における身体知研究序説』（創文企画、2017 年）」

斉藤仁一朗氏（課程資格教育センター）
「第 2 章　教育の基盤と「学び」に関わる問題と身体知」

篠原聰氏（課程資格教育センター）
「第 5 章　美術教育の哲学的基礎としてアート教育

――身体知研究の展開」

田中彰吾氏（現代教養センター）

全体的なコメント

本研究会では、「身体知」という概念の有益性とともに、その「限定」あるいは「限界」の問題や、教育実践との関連で「身体性」をめぐる規範性の問題などが論点となるとともに、オンライン形式での運営の難点も目立った。論点の深化をはかるとともに、公開でのシンポジウムの開催を期したい。

「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」（コア・プロジェクト２）

山花京子・吉田晃章・篠原聰・田口かおり

本プロジェクトでは 11 号館に収蔵されている古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）（以下、エジプト・コレクションとする）と 5 号館 1 階に収蔵されているアンデス・コレクションの活用に関わる環境整備と保全を目的としている。以下では、1）アンデス・コレクションと 2）エジプト・コレクションについてそれぞれの進捗状況を記す。

1）アンデス・コレクション

＊東京大学総合研究博物館小石川分館での展示「ボトルビルダーズ : 古代アンデス、壺中のラビリンス」展　9 月 24 日から 11 月 29 日まで開催

＊11月より、本学文学部文明学科の吉田晃章准教授が本プロジェクトの副リーダーとしてアンデス・コレクションの活用を担うこととなった。

＊ 2020 年 11 月よりアンデス・コレクション HP の運用を始めた。

＊ 11 月 15 日～ 17 日　吉田晃章氏・東京大学鶴見英成氏・岡山県立大学真世土マウ氏による新調査チームが発足し、アンデス・コレクションに収蔵されている遺物の全体調査を行った。

＊第 1 回研究懇親会が 11 月 17 日 15 時 20 分より 12 号館 5 階会議室にて開催された（吉田・鶴見・真世土・MNTC 喜多・TICAR 粟野・山花 各氏）。発表は 1）「笛吹き土器の形態と本学コレクションの特徴」（鶴見英成／東京大学）、2）「本学所蔵の笛吹き土器の内部構造と製作順試案」（真世土マウ／岡山県立大学）。

＊第 2 回研究懇談会が 2 月 19 日 15 時より 12 号館 MNTC にて開催された。発表内容は、1）「チャンカイ土器に関する所見――コレクションの特徴と笛吹コップ等の真贋裁定――」（浅見恵理／埼玉大学）、2）「ワウラ土器に関する所見――コレクションの特徴と真贋裁定――」（市木尚利／立命館大学）、3）「ビクス土器の構造に関する研究」（犬山尚樹／物理学科 4 年・前田悟／物理学科 4 年、真世土マウ／岡山県立大学、鶴見英成／東京大学、喜多理王／理学部）、4）「鳴るコップ」のレプリカから探る構造的特徴」（真世土・鶴見・吉田晃章／文学部）、5)「アンデス・コレクションで探る 3 D スキャンの可能性」（松前ひろみ／医学部・鴨下真由／考古学科 3 年・今西規／医学部・山花京子 / 文化社会学部・吉田晃章／文学部）、6)「X 線 CT 撮影によるナスカ骨製縦笛の復元」（粟野若枝／ TICAR・松前・吉田）、7）「ワークショップ「ともいきアートサポート」について計画案」（篠原總／課程資格教育センター・真世土マウ／岡山県立大学）。

2）エジプト・コレクション

＊ AENET コレクション内の紀元前 3 千年紀の土器資料について日本学術振興会 PD（竹野内恵太氏）との共著論考 "Fine pottery shaping technique in Predynastic Egypt: A Pilot Study on non-destructive analysis using an X-ray CT scanning system," を国際雑誌 Journal of Archaeological Science に投稿し、受理された。

＊硫黄製ビーズネックレスについての共著論考 "Ancient Egyptian Sulfur Beads" が 2021 年 1 月に国際誌 BEADS に掲載された。

＊総合研究機構プロジェクトの「考古学コレクションと生物学情報を統合した東海大学デジタル博物館の基盤構築」（代表 松前ひろみ助教）との共同研究で、デジタル博物館のコンテンツ作りの一環として、古代エジプトの「顔」のある遺物をデジタルスキャナーで測定し、 3 D データに変換した（9 月 17 日と 1 月 22 日）。

＊ AENET の HP をリニューアルするためのデータ及びコンテンツの抽出、英文訳出作業が継続的に行われている。

＊第 1 回「Early Egypt 研究会」が 2 月 25 日に開催された（3 号館 710 研究室）。この研究会は古代の初期王権の誕生や国家の成立について考古学及び文献学的な見地から多角的に研究することを目的として発足した。発表内容は「古代エジプトの顔面装飾の意義について――アイラインの持つ意味――」（小能治子／本学大学院文学研究科文明研究専攻）、「石製モデル容器・ミニチュア土器・副葬土器の互換性と機能分化――エジプト古王国時代の葬送習慣と供物儀礼――」、「アブ・シール・パピルスと第 5 王朝の神殿儀礼」（竹野内恵太博士／日本学術振興会特別研究員）、オシリス信仰の初現について―― Roeten, L., の論考から」（山花京子／文明研究所・文化社会学部アジア学科）。

「戦後大衆文化の基礎的研究――緒形拳氏関係資料の整理をめぐって――」（個別プロジェクト①）

馬場弘臣・紅谷龍司・兼平賢治・神谷大介

今年度も昨年度までと同様、臨時職員の岡崎佑也氏を中心に緒形拳氏所蔵資料の整理作業を進めた。今年度は展覧会（後述）の開催を目指して、とくに写真資料の整理と台本やパンフレットなどの追加資料の整理が中心となった。

これらの成果として、昨年度開催した付属図書館展示室 (11 号館 1 階) の展覧会に続いて、横浜市歴史博物館を会場とし、2020 年 10 月 3 日 (土) から 12 月 6 日 (日) の日程で、企画展「俳優緒形拳とその時代――戦後大衆文化史の軌跡」を開催した。こ

の展覧会では、1958 年から 2008 年までの 50 年間にわたる緒形氏の俳優活動を①新国劇と緒形拳、②テレビから映画へ、③多様化する大衆文化の中で、④時代の転換期に、⑤舞台への回帰の 5 つのコーナーに分け、さらに 12 の特別コーナーを設けて、その全俳優人生を紹介するとともに、それぞれの時代背景に位置づけた。

開催にあたっては、馬場が展示解説を行なうとともに、「戦後大衆文化史と緒形拳──俳優アーカイブの可能性──」と題する講演を行なった。この講演会については、『文明』No.26 に講演録を掲載した。また、俳優の豊川悦司氏と TBS プロデューサーの貴島誠一郎氏を招いてトークショーを開催し、展覧会記念冊子として、研究集録『戦後大衆文化史の軌跡－緒形拳とその時代－』を刊行した。記念冊子には緒形氏が書かれたエッセーを収録し、第 1 部では舞台・映画・テレビ関係者に緒形氏の思い出について筆を執っていただき、第 2 部では緒形氏が出演された NHK 大河ドラマを題材として、歴史研究者に歴史学と創作との関係について執筆していただいた。さらに緒形氏の作品 15 編の紹介欄も設けた。なお、本展覧会の開催にあたっては、アカデミスト株式会社を通して「緒形拳さんのアーカイブを構築し、大衆文化の変遷に迫る！」というタイトルでクラウドファンディングを実施し、目標 200 万円に対して 241 万 9000 円を集めることができた。

新型コロナウイルスの影響が続く中でも緒形氏のファンをはじめ、多くの方にご来場いただき、その総数は延べ人数で 7,611 人を数えた。また、横浜市歴史博物館が実施したアンケート (有効回答数 765 件) でも大変満足と満足があわせて 99.3%に達するなどおおむね好評であった。

ただし、緒形拳氏所蔵資料の整理についてはまだ終わったわけではない。今後は資料目録の整備とデータベース化、データベースの公開をめざしていきたい。

「人間営為と環境の関係性 ──人文学・社会学の視点から」（個別プロジェクト②）

中嶋卓雄・平野葉一・李昭知

本研究プロジェクトは環境研究を主とするが、とくに現在熊本キャンパスで続けられている環境省の「森里川海研究」（環境研究総合推進費 SII-5-2、平野葉一が参加）の主題を中心とした研究を含む。同時に、熊本校舎における「環境 QOL 研究」（総研プロジェクト、責任者：高橋将徳教授）との連携のもとでも進められている。従来は「超領域人文学研究」の国際シンポジウムにおける環境関連セクションへの参加、および、国際会議 ICICIC（International Conference on Innovative Computing, Information and Control）での「環境と QOL」セッション開催を主たる活動としてきた。しかし、今年度は COVID-19 のためにこれらの開催が中止となった。そのために、2020 年度はプロジェクト内部での研究会に加えて、「超領域人文学」の研究会に加わることで研究活動を進めることとした。

とくに今年度のプロジェクトでは、主としてコロナウイルスによる環境変化に対応する人々の活動について検討した。具体的には、コロナウイルスで環境が大きく変化するなかで、とくに観光のような本来は人々の移動を伴う人間営為がどのように変化するかについて、SNS 上のデータの解析を行った。また、研究者などにとっての研究環境としての文献調査に関して、Web 上での情報の開示やデジタル・アーカイブズ化について昨今の状況について検討した。これらの成果は、『文明』欧文誌に 4 本の論文（英文）、『文明研究』（文明学会）に 1 本の研究ノートとして投稿、受理されている。

「美人画に関する基礎的研究」（個別プロジェクト③）

篠原聰・山本和重・角田拓朗・今西彩子

本研究は、「美人画」の確立に大きく寄与した鏑木清方とその弟子たちの画業を浮世絵の受容という視点から考察し、日本近代における「美人画」の諸相を明らかにすることを目的としている。2020 年度は、鏑木清方の師匠である①水野年方資料（遺族提供）と、弟子の一人である②西田青坡資料（遺族提供）の調査を中心に据え、③木原文庫等の個人コレクターの作品調査等も進める計画であった。しかしコロナ禍により①と③については踏査等が困難となり計画の再検討を余儀なくされた。②については春学期中に神奈川県立歴史博物館から資料一括を松前記念館に移管し、夏休み期間中に資料調査のための環境を整え、秋学期以降に博物館実習生とともに基礎調査を進めた。

コロナ禍により一部の計画の変更を余儀なくされたが、以下の通り概ね計画の目標を達成することができた。

（1）①と②の基礎資料の目録化率 50% に対して、全資料の状態点検及び応急措置を実施
（2）論文や研究ノート、資料紹介等も含めた発表件数 3 件に対して、達成件数 9 件
（3）学会や研究会等を含めた口頭発表件数 1 件に対して達成件数 1 件
（4）外部研究者を招聘した研究会開催件数 2 回に対して、達成件数 2 回
（5）科学研究費等の外部研究資金獲得のための申請件数 1 件に対して達成申請件数 1 件

（1）については、コロナ禍のため①の踏査は延期とし②の基礎調査を実施した。スケッチや下絵の保存状態が悪く、基礎調査に入る前の作業として応急措置的な保存処置の必要性が生じた。よって目録の作成までには至らなかったが、全資料の状態調査点検を行い、また応急的な保存処置についてもすべての資

料に対して実施することができた。（2）については成果報告書として研究会誌『紫陽花』第 4 号も発行した。（3）（4）については、コロナにより延期となった「柿内青葉」展（女子美術大学美術館）に関するオンライン研究会を開催し、成果の一端を『柿内青葉』図録としてまとめ、発行した。また、延期となった同展覧会も 2021 年 5 月 19 日～ 6 月 25 日の開催が決定した。

本研究の成果の一端は、女子美術大学美術館で開催予定の「柿内青葉」展でも公開される。また、西田資料の基礎調査については博物館実習生が関与し、実物資料の取り扱い等を体験的に学ぶ絶好の機会ともなるなど、教育的な効果も見込めるため、次年度以降も継続的な調査研究が求められる。

『文明』第26・27号（2021年3月発刊）

■内容のご紹介　第26号

巻頭言

- コロナ禍と米国大統領選の 2020 年
（山花京子）

講演録

- 戦後大衆文化史と緒形拳──俳優アーカイブの可能性──
（馬場弘臣）

論文

- バリにおけるマイノリティ「バリムスリム」
──殺された聖人ワリピトゥをめぐるナラティヴ分析──
（東海林恵子）

研究ノート

- 博物館を考える（1）
（平野葉一，吉田欣吾，井上岳人、宍倉和弥）

■内容のご紹介　第 27 号（欧文誌 Special Issue of Covid-19）

- Preface （Kazushige YAMAMOTO）
- Introductory Address for the Covid-19 Special Issue
（Yoichi HIRANO, Takuo NAKASHIMA, Shogo TANAKA）
- Organizing Committee / Editorial Office

Part I. Keynote Papers

- The COVID-19 Infodemic and Intellectual Empowerment.
（Takayuki HIRAKI）
- The Analysis of Co-creative Actions for Tourism during the Covid-19 Pandemiche.
（Soji LEE, Takuo NAKASHIMA）

Part II. Concept and Theory

- Local Identity as the Concept of Agency.
（Toru HATTORI）
- Reconsidering the Meaning of “Living Place” for People
── From the Viewpoint of the History of Western Art and Thought.
（Tomoko NAKAMURA）
- The Problems Presented by the COVID-19 Crisis
── Centered Around Infodemic.
（Sei WATANABE）

Part III. Online and Digitization

- The Dialogue of Human Knowledge Through the Medium of the Internet ── Digital Archives Under the COVID-19 Pandemic ──.
（Mina ADACHI）
- Changes Amidst the COVID-19 Crisis──Limitations of and potential for the digitalization of reference material and disclosure on the Internet──.
（Takuo NAKASHIMA , Yoichi HIRANO）
- Current Status and Typification of Online Tourism in the New Normal Era.
（Masamitsu FUTAESAKU）

Part IV. Environment and Human Activity

- Analysis of Positive Feelings Toward Tourism During the COVID-19 Pandemic.
（Soji LEE）
- The Covid-19 Pandemic and eQOL (Environment-Related QOL)
（Yoichi HIRANO, Takuo NAKASHIMA, Masanori TAKAHASHI）

活動報告

大学院との連携

「国際シンポジウムでの経験ということ」

平野 葉一

これまで文明研究所の研究の一環として「超領域人文学」（Trans-Dsciplinary Humanities）研究を進めてきたが、これは大学院との連携を視野に入れたプロジェクトであった。本学の大学院文学研究科文明研究専攻は、一つの discipline だけからの研究ではなく、さまざまな領域から人間の文明を検討することを目的とする。その意味では文明研究所の趣旨も同様で、文明を考えるにはこうした複数の discipline を複合的、多角的に取り込んだ研究が必要となる。こうした趣旨をふまえ、「超領域人文学」研究では、文学研究科との連携──実際には文学部の研究教育補助金の助成プロジェクトとの連携──の下で、大学院生を取り込んだ研究を進めてきた。

この研究プロジェクトの目的は、個々の研究者や大学院生の研究テーマに関し、幅広い視野からの示唆、考察を加えることで、文明という人間営為を総合的に検討することである。とくに大学院生には、研究報告の機会を設定することで一つのまとまった研究を仕上げることを求めてきた。その一つが研究所員の田中彰吾教授とともに毎年デンマークのヨーロッパ学術センターで開催してきた国際シンポジウム「文明間対話」への参加である。小規模なシンポジウムとはいえ、プロジェクト参加している本学教員が中心となり、外国の研究者（多いときには 6 か国、全体で 40 名に上る）を交えた研究集会が 2 日間の日程で開催される。大学院生は、英語での発表原稿とスライドを準備して臨む。そのなかには外国の研究者のゼミ生である大学院生も含まれる。とくに報告後の質疑では、大学院生に対して学問的に厳しい質問がなされ、それでいて他の参加者が “ 援助 ” の手を差し伸べるといった温かい対応もなされる。こうした経験を経て、大学院生は英語で発表した自信と外国の研究者との交流という興奮とをもとに、欧文誌に向けて論文を仕上げることになる。大学院生を引率して参加する教員も、正直にいえば自分自身の発表もあってなかなか大変ではあるが、大学院生が段々と独り立ちをしていく光景には嬉しさを覚えることも確かである。また、夜に開催される懇親会では、大学院生と一緒にさまざまな研究者と議論を交わすことも楽しみの一つである。

研究発表というのは新しい知見を含むものでなければならない。それでも理工系とは異なって、人文系では先行研究の見方、捉え方に対する転換、再検討といったものも新たな知見として認められる。逆に考えると一つの題材に対していくつかの見解が存在することもあり得るわけで、国や地域によって多様な見方が出てくることも研究のおもしろ味である。たとえば、人間の生活の質の指標となる QOL にしても、政治を含めた社会への

参加度の高い北欧と日本ではその捉え方に大きな違いがある。デンマークでいう「ヒュゲ」（hugge）は幸福感や生活への充実感を基礎にした言葉で、人々が「安らぎやくつろぎの時間」を大切にする考え方を表している。この言葉の背景に人間と自然の共存があることを考えると、そこには日本とデンマークの生活観や環境観の違いが感じられて興味深い。この辺りも国際シンポジウムをとおして大学院生たちに体験してほしいことである。

2016 年から 2019 年まで 4 回を数えたデンマークでの国際シンポジウムが、大学院生教育にどの程度貢献できたかはわからない。それでも、この国際シンポジウムに参加してきた大学院生および大学院出身者から 2019 年度に 1 名（課程博士）、2020 年度に 2 名（課程博士、論文博士、各 1 名）の学位取得者が出たことは、シンポジウムを始めた筆者にとって喜びに値する出来事であった。

学部教育等との連携
「文化財の研究利用」

山花 京子

＊ 2020 年度は新型コロナウイルス感染防止対策のため、春学期は学生の大学構内立ち入りが制限され、秋学期もオンライン授業が続いた。本来、学生とコミュニケーションを取りながら文化財保護活動や活用を進めていく予定だったが、それらがすべて休止となったため、学生の学びとなる文化財の活用は残念ながら行うことが叶わなかった。

しかし、8 月には東京大学総合研究博物館小石川分館での展示「ボトルビルダーズ：古代アンデス、壺中のラビリンス」展に技術協力を行うため、本学理学部物理学科喜多研究室の学生（大学院生 2 名、学部生 6 名）と文明研究所、そして東京大学の共同プロジェクトとして笛吹き壺の録音が行われ、録音した音源は同展示会のデモンストレーションで披露された。

* エジプトの「顔」のある遺物の 3D スキャンデータ作成には、文学部歴史学科考古学専攻の学生がデータ処理に携わり、成果を上げている。

東京大学総合研究博物館小石川分館でアンデスの「笛吹き土器」の音を収録する理学部物理学科の学生たち

学部教育等との連携
「緒形拳・北條秀司資料と史料管理学演習」

馬場 弘臣

一昨年に設立した「緒形拳研究会」には、学生部会会員として学部生 8 名（男子 3 名・女子 6 名）が参加していたが、新型コロナウイルスのためにほとんど活動することはできなかった。本年度はプロジェクトの報告にあるように、横浜市歴史博物館において展覧会を開催した。本来ならば博物館で準備作業を実体験できる貴重な場となる予定であったが果たせなかった。

ただし、本年度も例年通り「戦後大衆文化の基礎的研究──緒形拳氏関係資料の整理をめぐって──」と、文学部歴史学科日本史専攻開講のウィンターセッション科目「史料管理学演習」とのタイアップ授業を対面で行った。また、本年度は、2004 年度から付属中央図書館に所蔵されていた、緒形氏の恩師にあたる劇作家北條秀司関係資料をＦ館で仮保管することになったために、これもあわせて近現代資料整理の体験授業として活用した。本年度の履修生は、2 年生 11 名（男子 8 名･女子 3 名）であった。授業では 2 人ひと組のチームを 3 チーム (Ａ～Ｃ) と、3 人ひと組のチーム (Ｄ) の 4 チームに分けて作業を進めた。

史料管理学演習の様子

まず最初に、横浜市歴史博物館の企画展で展示した資料をもとのファイルにもどす作業を行った。続いて全チームで未整理写真のファイリングと背ラベルの貼り付けを行った。その後、北條資料の整理に移り、Ｄチームは、北條氏の自筆原稿をダブルフラップフォルダーに入れた後、ファイルに綴じる作業を行った。また、Ａ～Ｃチームは、北條氏の蔵書を Excel に入力する作業を行い、最後にＢチームは北條資料の仕分け作業、Ｃチームは緒形資料と北條資料の配架作業を行った。

次年度は新型コロナウイルスの影響がどれだけ残るかわからないが、「緒形拳研究会」会員で大学院へ進学した学生もおり、また今回の史料管理学演習で興味を持った学生もいるので、彼らを中心に北條秀司・緒形拳資料の整理を続けるなど、実体験で歴史学とその基礎となる資料整理を学ぶ場を設けていければと考えている。

所員の活動

山本　和重
文明研究所長、文学部歴史学科日本史専攻・教授

【執筆】
- 「資料紹介　関東軍特種演習における動員と「防諜」──神奈川県津久井郡青野原村役場の動員関係資料から──」『東海大学紀要文学部』第 111 輯、2021 年 3 月
- 「書評　佐々木啓著『「産業戦士」の時代──戦時期日本の労働力動員と支配秩序』」『歴史評論』第 846 号、2020 年 10 月号
- 「追悼文　石丸熙先生を偲んで」『東海史学』第 55 号、2021 年 3 月

【報告】
- 「日中戦争期からアジア太平洋戦争期における兵士の動員と歓送（制限）──青野原村役場の兵事書類から──」アジア太平洋戦争期の相武地域史研究会（2020 年 9 月 16 日、オンライン）

平野　葉一
文学部文明学科・特任教授

【執筆】
- Yoichi Hirano, Takuo Nakashima, Masanori Takahashi, “The Covid-19 Pandemic and eQOL　(Environment-Related QOL) ”, Civilization, No.27 (Special Issue of COVID-19) , 2020, pp. 68-76
- Takuo Nakashima, Yoichi Hirano, “Changes Amidst the COVID-19 Crisis──Limitations of and potential for the digitalization of reference material and disclosure on the Internet──”, Civilization, No.27 (Special Issue of COVID-19) , 2020, pp. 50-55
- 平野葉一、吉田欣吾、井上岳人、宍倉和弥「博物館を考える (1)」,『文明』, No.26, 2020, pp. 46-56（研究ノート）［本研究は JSPS 科研費 20H01227 の助成による］
- 平野葉一、中嶋卓雄、安達未菜「コロナウイルス禍での人文学研究の課題と展望──資料のデジタル化とインターネットでの開示、その可能性と課題──」,『文明研究』, 東海大学文明学会, 第 39 号, 2020 年, pp.63-74（研究ノート）

【報告】
- 「数学史・科学史に関連する展示物作成とその活用」, 科学技術社会論学会　第 19 回年次研究大会, オーガナイズ・セッション：「博物館資料を活用した科学史の研究および展示・演示・アーカイブ化の試み」, 2020 年 12 月 5 日開催,［本研究は JSPS 科研費 20H01227 の助成による］
- 「モノがつなぐ歴史、人がつなぐ歴史」, 2021 年度数学教育学会春季年会, シンポジウム：「数学教育と数学史をつなぐ──教員養成に関連して──」, 2021 年 3 月 14 日,［本研究は JSPS 科研費 20H01227 の助成による］

田中　彰吾
現代教養センター・教授

【執筆】
- “When body image takes over the body schema: The case of Frantz Fanon” Human Studies, 43(4), 653 – 665, 2020 年 12 月（共著：Yochai Ataria, Shogo Tanaka）
- “Body-as-object in social situations: Toward a phenomenology of social anxiety” in C. Tewes & G. Stanghellini (Eds.). Time and Body: Phenomenological and Psychopathological Approaches (pp. 150-169). Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2020 年 11 月
- 「レクチャー②:「私」の多様なありかた」佐藤公治他著『臨床のなかの物語る力──高次脳機能障害のリハビリテーション』(pp. 42-68), 協同医書出版社, 2020 年 11 月
- 「第 2 章：ポスト身体性認知としてのプロジェクション概念」鈴木宏昭編著『プロジェクション・サイエンス──心と身体を世界につなぐ第三世代の認知科学』(pp. 39-57), 近代科学社, 2020 年 9 月
- 「自己と他者を区別する」『心理学ワールド』第 90 号, pp. 13-16, 2020 年 7 月

【報告・講演】（主なもの）
- 「From Body-as-subject to Body-as-object」What’s Next: The Future of Embodiment にて講演（オンライン開催）, 2021 年 2 月
- 「二つの神経病理事例から運動学習を考える」第 41 回バイオメカニズム学会学術講演会・シンポジウム「感覚運動学習のバイオメカニズム」にて報告（オンライン開催）, 2020 年 12 月

- 「On the Concept of Embodied Knowledge」The Embodiment Conference 2020・シンポジウム「Embodied Ways of Knowing」にて報告（オンライン開催），2020 年 10 月
- 「間身体性から見た対面とオンラインの会話」日本心理学会第 84 回大会，公募シンポジウム「ネットメディアの生態心理学」にて報告（オンライン開催），2020 年 9 月
- 「現象学の立場から：ポスト身体性認知としてのプロジェクション」日本認知科学会，第 37 回大会 OS「プロジェクション科学の基盤拡充を目指して」にて報告（オンライン開催），2020 年 9 月
- 「身体性から考えるミニマル・セルフとナラティブ・セルフ」新学術領域研究「新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」主催，2020 年度「顔・身体学」第 2 回心理班若手勉強会にて講演，2020 年 6 月

【その他の活動】（主なもの）

- アカデミックと VR ユーザをつなぐ学術イベント「Close Encounters of the Third Kind(第三種接近遭遇)」にパネリストとして登壇（オンライン開催），2021 年 2 月
- Frontier Consulting 社主催トークセッション「Frontier Session」にパネリストとして登壇（オフライン開催・オンライン配信），2021 年 2 月
- 心の科学の基礎論研究会 (第 87 回) ＆エンボディードアプローチ研究会 (第 9 回)・合同研究会の企画および司会（オンライン開催），2020 年 12 月
- 日本質的心理学会第 17 回大会・会員企画シンポジウム「現象学的人間科学への招待」の企画および司会（オンライン開催），2020 年 10 月

馬場　弘臣

教育開発研究センター・教授

【執筆】

- 「近世後期の相模国中央部における文化ネットワーク──『和田篤太郎日記』を中心に──」『年報 首都圏史研究 2019』, P.5 ～ P.20，2020 年 6 月
- 「戦後大衆文化史の展開と緒形拳」東海大学×横浜市歴史博物館編『戦後大衆文化史の軌跡──緒形拳とその時代』横浜市歴史博物館，P.82 ～ 115，2020 年 10 月
- 解説「資料から見る劇作家・北條秀司」北條秀司著『奇祭巡礼』（淡交社），P.278 ～ 283，2021 年 2 月
- 講演録「戦後大衆文化史と緒形拳──俳優アーカイブの可能性──」『文明』第 26 号（東海大学文明研究所），P.1 ～ 25，2021 年 3 月

【講演・講座】

- 講演「戦後大衆文化史と緒形拳──俳優アーカイブの可能性」横浜市歴史博物館，2020 年 12 月 5 日 (土)
- 展示解説「俳優緒形拳とその時代──戦後大衆文化史の軌跡」横浜市歴史博物館，2020 年 10 月 10 日 (土)，25 日 (日)，11 月 8 日 (日)、11 月 22 日 (日)

【その他】

- 横浜市歴史博物館企画展「俳優 緒形拳とその時代──戦後大衆文化史の軌跡」(2020 年 10 月 3 日～ 12 月 6 日) の監修
- 上記展覧会記念トークショー「緒形拳の作品のその魅力　豊川悦司氏×貴島誠一郎氏」の司会
- 東海大学×横浜市歴史博物館『戦後大衆文化史の軌跡──緒形拳とその時代』（横浜歴史博物館，2020 年 10 月）の企画・編集

山花　京子

文化社会学部アジア学科・准教授

【執筆・翻訳】

- 『ファラオのリーダーシップ』（東海教育研究所），2021 年 3 月
- 「古代エジプト中王国時代クヌムイト墓出土のガラス質メダリオン──ビブロスとの交易関係と物質の解明を中心として──」,『文化社会学部紀要』 第 4 号，2020 年 10 月
- Kyoko Yamahana, Yasunobu Akiyama, “Ancient Egyptian Sulfur Beads,” BEADS: Journal of the Society of Bead Researchers, vol. 32, pp. 15-24, 2021 年 1 月
- 山花京子、阿部善也、村串まどか「東海大学所蔵アンデス・コレクションのガラス玉の形態および理化学的分析と製作技法考察」,『GLASS』 第 65 号，3-25 頁，2021 年 3 月
- 山花京子、阿部善也他 「大原美術館所蔵の古代エジプト製ファイアンス製品に関する資料調査及び非破壊蛍光 X 線分

析」,『大原美術館紀要』第 4 号，I-1 ～ I-23，2020 年 8 月

【報告・講演】

- 「古代エジプトのガラス」，古代エジプト美術館「煌きと色の魔術師　エジプト　第二弾　～謎のガラス職人たち～」展オンライン見学会　講演，2021 年 2 月
- 「科学研究費基盤研究（A)「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」発表：2020 年度の研究課題と今後の展望」，科学研究費基盤研究報告会，2021 年 1 月
- 「正倉院のガラス」，日本ガラス工芸学会，オンライン研究会　司会進行，2021 年 1 月
- 『トト神を救え！古代エジプトの神像修復プロジェクト』，2020 年度研究交流会　クラウドファンディングに挑戦してみたい研究部門　ポスター発表　優秀賞，2020 年 12 月
- 『古代エジプトのヒヒ（トト）神の神聖なる言葉』，2020 年度研究交流会 リサーチアート部門 研究推進部長賞，2020 年 12 月
- 「日本ガラス工芸の先達たち　藤七、鑛三、そして潤四郎」，郡山市立美術館，日本ガラス工芸学会　オンライン研究会，司会進行，2020 年 12 月
- 「大人気！北欧ガラスのひみつ──北欧企業のマーケティング戦略──」，日本ガラス工芸学会　オンライン研究会，パネリスト，2020 年 11 月
- 「和のガラス──くらしを彩ったびいどろ、ぎやまん」，神戸市立博物館展覧会，日本ガラス工芸学会　オンライン研究会，コメンテーター，2020 年 9 月

【その他の活動】

- 「陶王子　器の来た道」劇場版，2021 年 1 月公開開始，プロダクション・エイシア、ＮＨＫエデュケーショナル，出演・制作協力
- 「学際型融合研究が始動　【文明研究所】アンデスの「音」に迫る」，東海大学新聞掲載，2020 年 10 月 1 日
- 「アンデスコレクション」のウェブサイトがオープンしました，2020 年 11 月 27 日，https://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/shonan/news/detail/post_1941.html
- 「アンデスコレクションに関する研究会を実施しました」，2020 年 12 月 7 日，https://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/shonan/news/detail/post_1942.html
- 「大原美術館 児島虎次郎ゆかりの新館、オリエントに光」，日本経済新聞　関西版，2020 年 9 月 4 日，https://www.nikkei.com/article/DGXMZO63401150T00C20A9AA1P00/
- ＜ミラクルライフ　古代エジプトの暮らし＞（２）　青色に「再生復活」願い，中日新聞社，2020 年 11 月 4 日，https://www.chunichi.co.jp/article/149578

篠原　聰

課程資格教育センター・准教授

【執筆】

- 「日本近代における浮世絵受容に関する研究──系譜的研究を中心に」（『鹿島美術研究』年報第 37 号別冊，公益財団法人鹿島美術財団，2020 年 11 月）pp.549-559
- 「柿内青葉と鏑木清方の弟子たち──烏合会と郷土会を中心に」（『女子美術大学コレクション展　柿内青葉』女子美術大学美術館，2021 年 3 月）pp.90-100
- 「障害者のための美術　──多様性という幻想」（『美学の辞典』丸善出版，2020 年 12 月）pp.632-635
- 書評「芸術を愛し、求める人々へ　芸術創造論」（『美術運動史』182 号，美術運動史研究会，2020 年 12 月）pp.11-17
- 「鏑木清方と青衿会の画家たち」（『鏑木清方と昭和の美人画（美術館叢書 22）』鎌倉市鏑木清方記念美術館，2021 年 2 月）pp.124-126

【報告】

- 報告「公開シンポジウム──持続可能な彫刻──の報告と北区の屋外彫刻保守作業」（屋外彫刻調査保存研究会）2020 年 12 月

【その他の活動】

- ともいきアートサポート事業（神奈川県との共同事業）による「創作×地域展示（平塚盲学校)」「常設展示（神奈川県立青少年センター)」の実施
- 「彫刻を触る☆体験ツアー」（松前記念館，2020 年 11 月 7 日）
- 「中高生のためのレベルアップワークショップ　触る楽しさ～彫刻を手と目でみよう！～」講師（北区文化振興財団，2020 年 11 月 22 日，23 日）
- 企画展「手の世界制作」展（松前記念館、2021 年 3 月）
- 「野外彫刻鑑賞アートウォーキング＆彫刻を触る☆体験ツアー！！ in 秦野」講師（秦野市文化スポーツ部文化振興課，2021 年 3 月 14 日）

東海大学文明研究所所報 2020
発行人　山本和重
発行日　2021 年 3 月 31 日
発行所　東海大学文明研究所
神奈川県平塚市北金目 4-1-1　〒 259-1292　tel.0463-58-1211　ext.4900 ～ 4902　fax.0463-50-2050